

第1章 2021・2022年度京都大学構内遺跡調査の概要

笹川尚紀

1 調査の概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営など掘削をとまなう工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果に照らして、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2021・2022年度には、以下のように発掘調査1件、立合調査6件をおこなった（括弧内は、図版1および表1の地点番号）。

発掘調査	医学部構内がん免疫総合研究センター新営（医学部構内AM20区）	（第2章，図版1-505）
立合調査	北部構内ヘリウム管配管工事（北部構内BG29区）	（第1章，図版1-506）
	本部構内携帯基地局設置（本部構内AT30区）	（第1章，図版1-507）
	本部構内花谷会館とりこわし工事（本部構内AT26区）	（第1章，図版1-508）
	病院東構内中央診療棟等改修機械設備工事（病院東構内AK17区）	（第1章，図版1-509）
	北部構内基礎物理学研究所電気不良箇所改修（北部構内BG34区）	（第1章，図版1-510）
	宇治グラウンド倉庫新設（宇治グラウンド）	（第1章，表1-511）

2 調査の成果

以上のうち、2021・2022年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、医学部構内AM20区に関しては、第2章で成果を詳述しているので参照されたい。

医学部構内AM20区の発掘調査 本調査区は、医学部構内の南東隅に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる。発掘調査の結果、縄文時代の自然流路や中世の土器溜・井戸、中世から近世前半にかけての土取り穴、近世後半から近代の溝・井戸などの遺構が見つかった。

本調査区では、全面にわたって不定形土坑が数多く認められた。それらは、黄灰色シルトを採取することを目的としたもの、すなわち土取り穴であったとみなされる。縄文時代後期に形成された公算が大きいとされる自然流路、12世紀後半や13世紀ごろの年代が与えられるとされる土器溜などは、その掘削によって破壊されずに残ったものであった。

黄灰色シルトの採掘に関しては、14世紀代にはじめられ、18世紀におよぶまで繰り返されたとされる。そして、不定形土坑の覆土のなかから検出された集石をめぐっては、土取

りがおこなわれた以前に、多量の礫を用いた遺構がその辺りに存在していた可能性が指摘されるにいたっている。

なお、不定形土坑の埋土からは、鋳型片や鞆の羽口片、数多くの鉄滓や鉄製品などがとりあげられている。くわえて、鋳型片のうちの1点は、密教法具の1つである六器の口縁部の外型にあたと断定されている。そうした事柄などを踏まえると、本調査区において鋳造がおこなわれていたという点をしっかりと排除するわけにはいかないだろう。

土取りの後、近世後半には、本調査区は耕地となった。おそらく、畑として使われたのだろう。検出された段差に依拠すると、本調査区には、少なくとも3つの土地の区画が存在していたのがうかがわれる。近世後半以降、19世紀末ごろにかけて、本調査区では、農作がおこなわれ、それにとまう溝や小穴などが設けられるにおよんだと想定される。

本調査区の性格について最も重要となるのが、土取りに係わる事柄である。その年代や仕方・人々の相違はさることながら、それがなされた時期の黄灰色シルトの標高はどれくらいであったのか、いくつかの遺構などは何故に土取りによる破壊を免れたのか、黄灰色シルトが採掘された後に本調査区の周縁から土が運ばれ地面をならすことがなかったのか、集石を構成する礫は本調査区の近辺から移されることがなかったのか等々、これらをめぐって、総合的に丹念に検討を加えていかなければなるまい。そして、さらには、本調査区だけでなく、それに近接するそれぞれの調査地点からみつかった土取り穴もまた対象に据えることで、考古学や文献史学などの見地に基づき、全面的に洗いなおすのが不可欠になるといえよう。本調査区付近における土地利用の変遷を明確に跡づけていくためには、以上のような分析を決して避けて通ることができまい。

立合調査について 507地点では、平安時代の遺物包含層より、「て」字状口縁手法のB類の土師器皿片1点がみつかっている。508地点では、弥生時代前期末の洪水性堆積物である黄色砂と、それを切る落ち込みがみうけられた。なお、511地点では、表土しか認められなかった。しかし、宇治グラウンドは、萬福寺塔頭跡という遺跡の範囲内に含まれているが故に、同地点の周辺に関しては、注意深く調査を進めていくのが肝要であろう。